



いわゆる古民家と言われる建物の軒は、一棟の建物でも方位によってその深さが異なります。日差しの季節による入り方を計算した軒です。日本列島は多雨多湿なので、そのことも踏まえた造りになっています。さて、今頃の季節、正午の日差しはどこまで入っているでしょうか。晴れた日の大間野町旧中村家住宅ではそのことを確かめることができます。

土蔵の構造

びっく！

越ヶ谷宿に古くから在る旧山崎家住宅(油長)内蔵(右の画像)が今年8月6日に国登録有形文化財となりました。(詳しくは越谷市HPをご覧ください。)
「油長」は当家の屋号です。この土蔵は江戸時代後期の建築とされています。当家に逗留した国学者・平田篤胤も見たかもしれません。その後何度か改修されてこの姿になりました。基本的構造はそのままです。今号では大間野町旧中村家住宅とさいたま市Y家の土蔵の構造について見ていきます。



改修前の状況



改修後の状況

「金庫みたい!」「シェルターだあ!」



掛け子



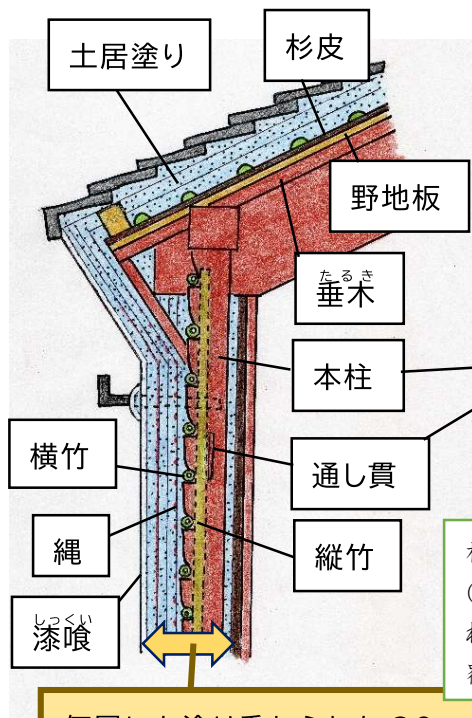
頑丈な格子戸(潜り戸付)細かい目の金網張り

大間野町旧中村家住宅に社会科見学に訪れた小学生が土蔵の重厚な扉を見て発した言葉です。厚さは30 cmほどあり、黒漆喰で丁寧に塗り固められています。この画像のように左右の扉同士が合わされる部分は階段状になっていて、火や水が容易には入らないように工夫されています。(掛け子という造り)その背後にはさらに二つの戸があります。

一階部分には窓がない土蔵も多く、二階に1つまたは2つの窓があり、鉄格子がはめられています。二階の屋根裏部分は右の画像のように太い部材が組まれています。

土蔵の壁と屋根は他の建物(主屋など)には見られない構造となっています。その材料も、古来のものには現代建築にはないものも使われています。床下が深く、湿気が入りにくくしています。床面は主屋よりも高くなっていることが多いようです。水害が多かったからでしょう。こういう土蔵の屋根と壁の構造模式図は次のようになります。





何層にも塗り重ねられた 30 cmの土壁

大間野町旧中村家住宅の土蔵の柱は、87cm又は113.6cmごとに建てられています。柱と柱の間は通し貫^{ぬき}という部材で何段にも繋がれ、それらを内と外からの分厚い壁土で覆っています。その壁の断面模式図が左図です。

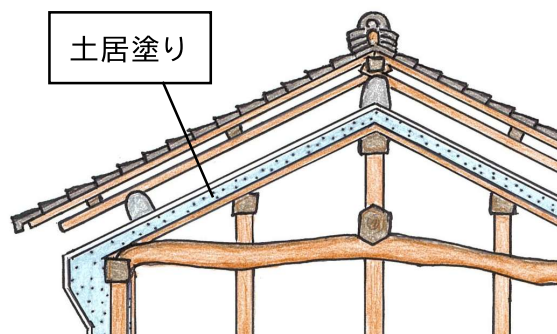


柱と通し貫^{ぬき}の間の竹の格子(＝竹小舞^{こまい})に壁土を塗り入れ、さらに柱や通し貫も壁土で覆います。



土壁を何層か塗り重ねる過程で縄を張り、その上にまた土で塗り重ねます。

土蔵は屋根の造りにも特徴があります。上の模式図とは異なる屋根は右の図のタイプで、さいたま市・Y家の土蔵がその例です。これは土居塗りの上にかかる屋根との間に空間を設けたもので、この空間は土蔵内の湿度や温度を上げない工夫です。このような屋根を「置き屋根」とか「鞘屋根」といいます。万一火事で上の屋根が燃えても、土蔵



内部には火が入らないようにしています。このタイプは越谷市域にはあまりみられません。左の写真は、さいたま市・Y家の置き屋根土蔵です。

白壁漆喰には「角又^{つまた}(又)」という海藻から抽出した物質を混ぜて用います。漆喰に粘性を持たせて定着しやすくするためです。

(【参考文献】『伝統建築事典』(井上書院): 模式図は本書掲載の図を一部改変し、彩色したものです。他)

文化財の仕事を経験

中学校では「社会体験チャレンジ事業」に参加して、様々な仕事の現場で職業体験をしています。9月中旬、市立南中学校2年生4名が旧東方村中村家住宅で2日間の学習をしました。

4名は地域の歴史や文化に興味を持ち、それに関した職業にはどのようにして就くのかとか、そのためにはどんな勉強をしたらよいかなどと、職員に質問するなど、とても積極的・意欲的でした。



布ぞうり作り講座の受付業務体験。来館者を案内する練習も行いました。



遺跡から出土した土器片に、遺跡名、出土場所などを面相筆とポスターカラーで記入しているところ